

企業名： デクセリアルズ株式会社

レポート名：「デクセリアルズ統合レポート 2023」

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

この問いに対する答えは、「はい」である。

同社は、2019年より始めた中期経営計画（以下、「中計」とする。）が2023年度で5ヵ年計画の最終年度となり、当該中計での当初目標は3年前倒しで達成し、上方修正後の目標数値も2年前倒しで達成している。同社が「稼ぐ力」を示す指標として重視しているEBITDAは、計画始動前の2018からの5年間でCAGR+41.8%という驚異の成長率で推移している。

このように成長の波に乗っている同社では、中計2023の計画期間終了に伴い、2024年度より新たな目標と将来像を掲げた中計を始動させる。当レポートでは、後述するが、次期中計で同社が目指す将来の姿やビジョン、経営環境や社会情勢の見通しを高い解像度で詳解しているため、同社が目指す将来の姿が理解できるという結論を提示することができる考えた。

同社では、これまで自社の経営基盤たるビジネスモデルの確立と成長に焦点を合わせて、事業の拡大に取り組んできた。その努力が、先に述べた計画目標の前倒しでの達成や高い成長率といった形で結実している。今後の経営課題は、気候変動や少子高齢化による人口減少、未知の感染症の流布など、社会全体レベルでの事業環境の変化に対応しながら、不確実性の高い将来期間において、これまで築き上げてきた事業をサステナブルに成長させていくことである。同社は、社会全体の効率化に向けて、デジタルテクノロジーの発展に不可欠な財・サービスひいてはソリューションを提供することを自社の存在意義、すなわち「パーパス」に据えている。この「パーパス」を軸に、知的財産技術といった「技術」とグローバルで活躍できる人材を迎え入れ、育てるための人事制度といった「人財」の2点を最重視して、サステナビリティ経営を実現するというビジョンが、同社が目指している将来の姿であると理解することができるレポートであった。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

この問いに対する答えは、「はい」である。

同社の現在のビジネスモデルは、主にBtoBであり、光学材料や電子材料の部品を製造し、当該材料を使用する最終製品のメーカーに販売するサプライヤーである。同社の強みは、直接の取引先である顧客に対して、ただ自社製品の材料やデバイスなどの提供をするだけで

なく、それに伴うコミュニケーションを通じて、顧客の気づいていない技術的な課題を見つけ出すことにある。そのような課題に対して先回りでアプローチすることで、付加価値の高い製品を開発・提供することができるため、同社は業界において替の効かない競争優位なポジションを築き上げていることが理解できた。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

この問いに対する答えは、「はい」である。

同社の事業経営の姿勢は、目の前の取引先の抱える課題というミクロな視点から社会課題というマクロ的な視点まで、多角的な視点から課題を探索し、それに対するソリューションにつながるような技術の検討を重ね、新たなビジネス機会の獲得や事業創出に向けて課題解決に意欲的に取り組むというようなものである。社会情勢や事業環境が日々目まぐるしく変化する昨今においては、取引関係にある顧客もそのような変化の影響を受け、日々新たな課題が潜在的か顕在的かを問わず生じるであろうし、このような社会が抱える課題はますます増えるとともに、その解決のための難度も上昇していくことは、もはや言うまでもない。変化の激しい現在および将来の社会において、同社のように常にアンテナを張って課題解決に精力的に取り組む戦略による競争優位性は、社会の課題が全て解決され尽くすようなことがあるまでは、持続していくものと考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

この問いに対する答えは、「はい」である。

同社では、事業経営の基盤として最も重要である技術力の向上・維持とともに、それと同じレベルで人財を最重要視している。その姿勢や考え方が最もよく表れているのが、多様な働き方とワークライフバランスを認め推進する組織風土や制度が確立されていることである。そのため、自分自身にとって最も適している方法で働くことができる。そして、充実した多様な研修プログラムが整備されているため、同社で自分がどのように活躍できるかのイメージを形成しやすいと言える。さらに、前述したように、同社は社会の至る所に潜む課題を社員の一人一人が日々の業務の中から見つけ出し、意欲的に課題解決に取り組むことで、企業価値向上に繋げているため、自分自身の人財資本としての価値を高められると感じた。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

このレポートでは、全体的に可読性の高いフォントと色遣いをしており、文字や写真を自然な目の動きの動線上に配置するなど、読み手に伝えやすくする工夫が感じられた。また、随所に文章の内容の補足となる定量データがグラフや表形式で掲載されており、形式だけでなく内容面でも説得力のあるレポートとなっていた点が良かった。

改善余地としては、財務ハイライトや非財務数値情報のグラフにおいて、今年度の実績のみならず、昨年度以前の数値もグラフ内に書くべきであると考えた。なぜなら、表には昨年度以前の数値データも掲載されているが、グラフと表を往復して見ないと、今年度までに至る数値の連続性や伸びなどが把握しづらいからである。